

厚生労働科学研究費難治性疾患政策事業  
分担研究報告書

脊柱靱帯骨化症に関する調査研究

研究分担者 竹下 克志 自治医科大学整形外科 教授

研究要旨：頸髄症手術患者において、ロコモの患者立脚型評価であるロコモ5が術後転倒の予測因子となるか前向きに検討した。術後1年間観察できた132名中、42名（32%）が1回以上、25名（19%）が複数回転倒していた。複数回転倒群とそれ以外の群間比較で有意差があった項目は、過去1年間の転倒、握力、ロコモ5、JOAスコア、SF-12-PCSの5項目であった。多変量解析を行うと、過去1年間の転倒とロコモ5が複数回転倒の独立した危険因子であった。

A. 研究目的

ロコモの自記式簡易評価法であるロコモ5が圧迫性頸髄症術後転倒の予測因子となるか検討すること。

B. 研究方法

本研究はOPLL研究班の多施設研究として実施され、各施設で倫理委員会の了承を得て実施している。対象は2016年10月から1年間に圧迫性頸髄症に対して手術治療を予定した168名である。研究参加時に転倒に関する記録帳を配布し、術後1年まで転倒の詳細を記載するように依頼した。ロコモの患者立脚型評価としてはロコモ5を使用し、術前に評価した。その他の術前機能評価としてJOAスコア、SF-12、EQ-5Dを、また代表的な転倒のリスク因子である過去1年間の転倒、握力、内服薬の総数、睡眠薬使用についても術前に調査した。

C. 研究結果

168名中術後1年間の経過観察を終了し、転倒手帳が回収できた132名（男83名、女49名、平均年齢69歳）について解析を行った。術後1年間に119回の転倒が観察され、42名（32%）が1回以上、25名（19%）が複数回転倒していた。複数回転倒群とそれ以外の群（転倒なし、または1回転倒）の比較で有意差があった項目は、過去1年間の転倒、握力、ロコモ5、JOAスコア、SF-12-PCSの5項目であった。複数回転倒を従属変数として多変量解析を行うと、過去1年間の転倒とロコモ5が独立した危険因子と判定された。ROC分析を行うと、ロコモ5による複数回転

倒予測の最適なカットオフ値は12であった。

D. 考察

転倒の発生要因は多岐にわたるため、一般に歩行能力の定量的な評価よりも、転倒に関連した複数の日常生活動作を含む患者立脚型評価の方が予測に有用と報告されている。本研究の結果は、ロコモの進行が転倒リスク増大と密接に関連しており、ロコモの患者立脚型評価が転倒リスクの評価にも応用できる可能性を示唆している。

E. 結論

頸髄症術後患者の転倒の危険因子として、過去1年間の転倒とロコモ5が独立した危険因子であった。

F. 健康危険情報：該当なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

The 5-question Geriatric Locomotive Function Scale predicts postoperative fall risk in patients undergoing surgery for degenerative cervical myelopathy.  
J Orthop Sci 2020 ;S0949-2658(20)30274-8

2. 学会発表

頸髄症に対する手術治療とリハビリテーション医療、日本リハビリテーション医学会2020、京都

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得：該当なし。

2. 実用新案登録：該当なし。

3. その他：該当なし。